

東日本大震災から8年半 地道に続ける支援

東日本大震災から8年半が経つ。被災地への支援が減少する中、北海道教区上川南組が宮城県気仙沼市鹿折地区ししあづりに応援旅行、九州などの寺院の夏休みを利用したホームステイ事業、宗派の里帰り支援など、各地で地道な支援活動が続けられている。

宮城・気仙沼に応援旅行

北海道上川南組 ジンギスカン鍋で交流

津波被害を受けた宮城気仙沼市鹿折地区の住民を昨年からの支援する北海道教区上川南組（打本厚中組長）は8月20、21日、同地区で「夕涼みの集い」と法話を開催した。

同組は8年前から「東北応援旅行」として3月と8月の年2回、宮城、福島の被災地を訪ねる支援活動を行ってきた。その中で、鹿折地区の「すがとよ酒店」を営む菅原文子さん（70）と出会ったことで、昨年からは8月の旅行は同地区を訪ねる。打本組長（64）は「菅原さんから、災害公営住宅への入居が進むが、まだまだ支援が必要な現状だと聞き、定期的を訪ねようと考えた」と話す。そして、住民が暮らす災害公営住宅を訪ねるようになった。

今回は、7人の僧侶、門信徒が肉12キを持参し、公営住宅の集会所で「夕涼みの集い」を開いた（写真上）。ジンギスカン鍋を振る舞い、住民40人と交流。自治会長の斎藤信夫さん（77）は「3年前に仮設住宅からここに移った。高齢者が多く、一切出てこない人もいて、3日前も孤独死が発見された。他県から支援の方が訪れてくれることで、入居者同士の交流が生まれることもある。私たちのことを忘れずに訪ねてくださるボランティアの存在は有り難い」と喜ぶ。ジンギスカン鍋をおいしそうに食べる三浦聖瑛倅さん（16）は「お父さんに持って帰って食べさせようと思う。やさしく親切なお坊さんは憧れの存在」と話した。4人の子と一緒に参加した女性（33）は「北海道から再び来てくださり、励ましてもらって力になる」と話していた。21日には「す



がとよ酒店」で法話会を開いた（同右）。

また同組は、大震災直後から、特産物のラベンダーを組内寺院の仏教婦人会員が匂い袋にして被災地に贈る活動が続けており、今回も600個を持参し、手渡した。

旅行に参加した同組弘誓寺門徒の中野芳宣さん（71）は「震災から8年以上が経っているが、頭の整理が追い付かない人にも出会った。被害がまだ続いていることを実感した」と話す。

打本組長は「復興が進み、盛り土で景色が変わり、地元の人たちは、自分たちの故郷が変わってしまうことに気持ちがついていかないうちに思った。訪ねるたびに再会を喜んでくださる人がおられるのが活動の原動力。応援旅行でできた東北の友人を訪ねる旅を続けた」と話した。



がとよ酒店」で法話会を開いた（同右）。